

2024 年度（総合型選抜）AO選抜入学試験
文学部 言語コミュニケーション学域 「人文学プロポーズ方式」

1. 実施状況

志願者数、合格者数等

学科・学域・専攻	志願者数	一次合格者数	最終合格者数
言語コミュニケーション学域	14	7	3

2. 第一次選考<ES(エントリーシート)と課題レポート・志望理由書等>

(1) 評価ポイント

以下4点が、どれかひとつではなく、すべて充足しているかどうか。

- ① 学域（専攻）の学びを理解し、自身が学びたいこと、探究したいことが照応しているか。
- ② 学びたいこと、探究したいことを4年間で実現する過程が、具体的に記述できているか。
- ③ 一般論でなく自分の言葉で、自身の能力や経験等に基づき説得的に説明されているか。
- ④ 学びたいことや探究したいことにかかわる、受験時点でも備えておくべき知識や能力を有しているか。

(2) 解答状況

志願者数と一次合格者数からわかるように、(1)で記載した②③④のいずれか、もしくは複数の観点で不十分な志願者が少なくありませんでした。評価が高かった志願者のエントリーシートは、とても丁寧かつ具体的で、入学後に実現したい学びについて一貫性のある主張があり、今まで取り組んできた活動実績による裏付けも示されていました。一方、さまざまな話題が列挙されているものの、それらがどう関連しているのか読み取れないエントリーシートも多く、それらは必然的に難しい評価となりました。

具体的で説得的な記述には、深い思索としっかりとした絞り込みが肝要です。たとえば志望理由やプロポーザルシートのなかで、小説の技法、上手なコミュニケーション、言語研究、日本語教育、と書くだけでは学びたい分野名を挙げていることと変わりません。「どのような」、そして「なぜ」、小説、コミュニケーション、言語教育、日本語教育なのか、さらには、自身のこれまでの経験や身につけた学識、不足している素養などをきちんと振り返り、言及することで、より具体的で、説得力があるものになります。

3. 第二次選考

(1) 評価ポイント

第二次選考ではプレゼンテーションと個人面接を通して、次のような点を評価しました。

- ① 言語コミュニケーション学域で学ぶための基礎学力を有しているか
- ② 自ら主体的に考え、行動してきた経験があり、入学後同様に主体的に学ぶ意欲があるか
- ③ 人文学のトピックを論理的かつ独創的にとらえ、考えられているか
- ④ 自身の考えを正確に伝えられる資料と説明を提示することができているか
- ⑤ 文学部と本学域の学びを理解した上で、テーマを探究するための適切な計画が立てられているか

(2) 解答状況

プレゼンテーションでは自身の活動経験を踏まえ、言語コミュニケーション学域の学びに関連づけた形で問題を明確にし、解決に至る過程を提示するものがいくつか見られました。また、プレゼンテーションの資料や説明はよく準備されていました。その一方で「これまでの活動経験」「自身が探究したい《問い》」「大学での学びの計画」のつながりが漠然としているために説得力に欠けるものや、実践的なテーマを掲げているものの現場を知らないままに議論を進めて説得力に欠けるものなどが散見されました。

学習・活動計画では、卒業後のキャリアイメージは明確であるが、学習計画に曖昧な部分があったり、逆に学習計画はしっかりと立てられているが大学での学びを通して何を不得て将来にどう活かすか、全体のバランスが悪かったりするものも見受けられました。また、今回は、研究対象への理解が不十分であるというものもいくつか見られました。

個人面接における応答の姿勢は、面接者の質問の意図を適切に理解し真摯に対応するもので、みな適切でした。

(3) 試験（プレゼンテーション・面接）内容

プレゼンテーションでは、予め準備した PowerPoint によるスライド資料を用いて、自身が探究したいテーマや学習・活動計画を示してもらいました。またその内容に基づき、質疑応答を行いました。

面接では、エントリーシートに基づき志望動機や将来の展望を語ってもらう、研究対象についての知識や興味を確認するなどの、質疑応答を行いました。

(4) 出題（プレゼンテーション・面接）の意図

プレゼンテーションも個人面接のいずれも（1）で述べた点を評価するためのものです。

(5) 受験生に望むこと、その他気付いた点

プロポーズ方式は、受験者自身の深い関心に基づいたテーマ、さらにはそのテーマについての自分なりの《問い》が求められます。そして、その《問い》は、自身にとって重大な経験や精密な観察、強い関心と深い思索に基づいたものでなくてはなりません。また、その前提として、研究対象についての基礎的な知識（キータームの的確な理解や定義、最低限の読書や予備調査など）が不可欠です。

自身のテーマと《問い》がどのように大学での学びの中に位置付けられるのかをしっかりと考え、抽象的なキーワードの羅列ではなく、自身の言葉で語るができるプレゼンテーションや学習・活動計画の提示を望みます。

以上